

中国語母語話者の中国語作文における「連詞」の使用特徴とその特徴が日本語作文に与える中国語干渉について

範 海 翔

Abstract

範(2010a)(=Fan(2010a)) studied the frequencies of conjunctive expressions used in the Japanese compositions by Chinese learners of Japanese. It was found out that they used more conjunctive expressions than native speakers of Japanese, the reason of which is considered to be that Chinese learners exploit different ways of textual development from native Japanese. Besides, in terms of the kinds of conjunctive expressions, Chinese learners more often use the conjunctive expressions of 'jyunsetsu' (copulative) and 'tenka' (additive), and less often 'gyakusetsu' (adversative) or 'hosoku' (supplementative), when they write in Japanese. .

In order to identify the factors which cause the phenomenon above, the present paper studies the usage of 'Renshi' in Chinese compositions by Chinese learners. As a result, the interference of Chinese usage of 'Renshi' with the Japanese compositions by Chinese learners was confirmed, particularly in their frequent use of the conjunction of 'jyunsetsu'. On the other hand, Chinese use Japanese 'gyakusetsu' expressions far less often, while actually they do use 'gyakusetsu' with almost the same frequency when writing in Chinese as native Japanese speakers when writing in Japanese. Therefore, the infrequent use of Japanese 'gyakusetsu' by Chinese learners has nothing to do with interference, but it is probably due to Chinese learners' lack of knowledge about 'gyakusetsu' in Japanese.

As for the frequent use of 'tenka', 'hosoku', and 'doretsu' (appositive), it should not be attributed to the interference of Chinese, but rather to their unique way of textual development when trying to make their Japanese compositions more persuasive and understandable, although here again they have not yet sufficiently mastered the relevant Japanese way of textual development.

キーワード 中国人日本語学習者 接続表現 連詞 母語干渉

中国語母語話者の中国語作文における「連詞」の使用特徴とその特徴が日本語作文に与える中国語干渉について
(範)

1 はじめに

範(2010a)は日本語母語話者と中国人日本語学習者の日本語意見文における接続表現の使用状況について調査したものである。調査によって中国人日本語学習者の作文における接続表現の使用は日本語母語話者より上回っていることを明らかにした。中国人日本語学習者が接続表現を多用することについて、範(2010a)では3つの要因にまとめた。つまり、①学習者が接続表現を「使っていけない場合に使ってしまう」という誤用の要因、②接続表現を「省略しても良い場合に省略しない」という省略に関する要因、③「中国人日本語学習者の特殊な文脈展開による多用」という文脈展開に関する要因である。

以上の諸要因は、あくまで中国人日本語学習者の作文における接続表現を考察する時に見られた現象からまとめてきたものである。言語の研究は言語の現象面だけではなく、この3つの要因を引き起こした言語内部の深層的な要因を探るべきだと考える。以上の問題を考察する前に、まずこの3つの要因を2種類に分けて考えていきたいと思う。要因①は明らかに接続表現の誤用に関するもので、学習者の接続表現の誤用について市川(1998)はすでに詳しく論じている。本稿は主に異なった文化圏で育てた中国人日本語学習者(中国語母語話者)と日本語母語話者の間に、文章形成における接続表現の使用特徴に如何なる違いがあるかに焦点をあてるため、その使用特徴を引き起こす要因についてのみ検討したいと思う。そのため要因①は今回の研究対象から除外する。さらに要因②について範(2010c)は日本語学習者と日本語母語話者の接続表現の省略の調査を通じて、明らかにしているため、本稿は「中国人日本語学習者の特殊な文脈展開による多用」という要因③のみ考察の対象にしたい。

文章の文脈展開について、市川(1978: 88)は「文と文がつながって、文脈が形作られていく。文脈における思考方式を端的に示すものは、文と文をつなぐ接続語句¹⁾である」と述べている。つまり文章における接続表現は文脈展開を担う重要な言語単位である。同じことを文章化する時、異文化に所属する日本語母語話者と日本語学習者は必ず異なる思考方式を取ると思われる。そうだとすると異なる文脈展開は生じると予測される。この点について範(2010b)は日本語母語話者と中国人日本語学習者の日本語作文における文脈展開を比較し、t検定を使って両者の相違を明らかにした。日本語母語話者と中国人日本語学習者の間には「順接型」²⁾「対比型」「転換型」「補足型」などの接続表現の使用に有意差があり、「逆接型」「添加型」「同列型」「連鎖型」の使用についてはほぼ同じで有意差が見られなかった。以上の中国人日本語学習者の接続表現の多用や文脈展開の相違などはあくまで日本語の作文を分析したものであり、このような多用や相違に至る要因については母語干渉の面から検討する必要があると考える。

以上の問題意識に基づき、本稿は国立国語研究所が作成した「日本語学習者による日本語作文と、その中国語訳との対訳データベース ver2 正式公開版」に収録された中国人日本語学習者の中国語作文「关于吸烟」(たばこについてのあなたの意見)⁴³編を調査対象にする。中国人日本

語学習者の作文における接続表現の多用や文脈展開の異なりについて母語干渉の面から検討する。中国語干渉があるか否かを調べるためにまず以上のデータベースに収録された中国語作文の接続表現(連詞)を統計する。中国語作文における接続表現の使用と中国人日本語学習者の日本語作文における接続表現の多用との関係を考察する。さらに範(2010c)では明らかにした中国人日本語学習者と日本語母語話者の文脈展開における相違の要因を、中国人日本語学習者の中国語作文における接続表現の使用実態から探る。

2 中国語の「連詞」

中国人日本語学習者の中国語作文における接続の表現を分析するため、本論に入る前に中国語における接続の表現について述べておきたい。中国語では文と文をつなぐ接続表現にあたるものは「連詞」と呼ばれる。本節は「連詞」の定義、取り扱う「連詞」の範囲、「連詞」の類型などについて述べる。

2-1 「連詞」の定義と範囲

中国語には文と文の接続の表現が数多く存在する。例えば呂(2005)の「接続詞」、張(2000)の「連詞」などがある。張(2000:142)は「汉语的连词是一种具有多层次链接功能的虚词,既可以连接词和短语,也可以连接小句和句组」(中国語の「連詞」は多次元的接続機能を持つ虚詞であり、語と語、節と節、文と文などを接続することができる言語単位である)と指摘している。本稿は文の単位を超え、いわゆるテキストや文章のレベルにおける接続表現の使用を中心に考察するものであるため、張(2000)の広意の「連詞」に対して、より狭義的な文と文の接続の「連詞」のみを考察したいと考えている。そのため、張(2000)の「連詞」に関する定義に基づき、「連詞」であるか否かを判定する際に、まず接続する機能の有無を重要な要因として考え、さらに語と語の接続か、節と節の接続か、文と文の接続かなどのどちらかを見極める。その中の文と文のつなぐ表現のみを本稿の研究対象にする。より正確に「連詞」の認定を行うため、呂(1980)や『新華漢語辞典』を参考した。

2-2 中国語における「連詞」の類型

「連詞」の分類法は類型方は先後文の意味関係、「連詞」の形式、さらにそれら2つの基準を融合する方法など3つの基準で類型することが多い。これまで発表した拙論では日本語の接続表現について市川(1978)の文と文の意味関係を基準にする類型法を利用し考察してきた。考察の便をはかるため、本稿は市川(1976)と類似する張(2000)の先後文の意味関係に関する類型法を利

中国語母語話者の中国語作文における「連詞」の使用特徴とその特徴が日本語作文に与える中国語干渉について(範)

用する。中国語の「連詞」は文と文の意味関係の面から 9 種類に分けることができる。具体的に次のようである。

(1) 「因果」前文で示された理由を条件とする、その帰結を後文に述べる型

例：所以・因为・因而・由于・可见・由此・无怪・无怪乎・难怪・可见など

訳：だから・ですから・そうするとのような意味

例 ① 我跟他一起工作多年了。所以很了解他的性格和作风。(下線部は「連詞」)

(私は彼と長年いっしょに仕事をしたから、彼の性格や仕事をよく知っている)

(2) 「並列」前文の内容に付け加わる内容を後文に述べる型

例：同時・另一方面など

訳：と同時に・そして

例 ② 造林可以保持水土。同时也可以制止流沙。(植林は水と土の保全に役立つばかりでな

はなく、それと同時に流砂の防止にも役立つ)

(3) 「転折」前文の内容に反する内容を後文に述べる型

例：但・然而・当然・自然・不料・幸而・幸亏・幸好など

訳：しかし・それなのに・けれどもなどの意味

例 ③ 尽管妈妈再三提醒。但是他还是把作业本忘了。(お母さんが何度も注意したのに、彼

はやはり宿題帳を忘れた。)

(4) 「递進」前文の内容を補足する内容を後文に述べる型

例：而且・不仅・并且・甚至・再说・何况・况且など

訳 そのうえ、それに、さらになどの意味

例 ④ 从陆路可以去，从水路也可以去。并且更近一些。(陸路からも行けるが、水路からも

行ける。しかも多少近道になる。)

(5) 「条件³⁾」前文の内容を実現する時の必要条件が後文に述べる型

例：不管·只要・无论只有など

訳：接続助詞 ...ても、...にせよなどの意味

例 ⑤ 网球比赛定在星期二举行。不管天气怎么样。(テニスの試合は火曜日に行く。天気はいかにかかわらず)

(6) 「目的」 前文の事柄の目的を後文に述べる型

例：为了・借以・省得・免得・以免など

訳：...のための意味

例 ⑥ 这一点应该清楚的写进合同。免得日后发生纠纷。(この点をはっきり契約書に書きこんでおくべきだ。あとでトラブルが起きないように。4)

(7) 「仮設⁵⁾」 前文の内容を反する仮説を後文に述べる型

例：如果・倘使・假使・果真・果然など

訳：接続助詞 たら・ば・なら・となどの意味

例 ⑦ 我可以替他带去。如果东西不太多。(ついでにもっていってもいいのに。品物がそれほどさえなかったら。)

(8) 「選択」 前文の内容に対して対比的内容を後文に述べる型

例：或者・还是など

訳：或は・それともなどの意味

例 ⑧ 他一时还吃不准西装该买米色的。还是买藏青色的。(彼は即座には決めかねた。背広はベージュのを買うか、それとも紺色にするか。)

(9) 「連貫」 前文と後文は時間的前後関係を表す型

例：于是・接着・后来・然后など

訳：その次・その後などの意味

例 ⑨ 大家都同意，于是他也就不反对了。(みんなが賛成したので、彼も反対しないことにした。)

以上の類型は張(2000:186-190)の類別方法を参考にした。用例とその日本語翻訳文は『中日辞書』(小学館)の例文をそのまま引用した。ただし、日本語の翻訳文の順序は中国語にあわせ

中国語母語話者の中国語作文における「連詞」の使用特徴とその特徴が日本語作文に与える中国語干渉について(範)た。

3 中国語作文における「連詞」の調査結果と考察

3-1 結果

今回の調査対象になる中国語の作文は 43 篇である。この 43 篇の作文は合計 590 文⁶⁾からなっている。590 文の間に合計 196 個の「連詞」が使用されている。「連詞」の使用率は 33.2%である。範(2010a)の日本語母語話者の日本語作文の接続表現の 24.6%の使用率を上回っていることが分かった。中国語作文における「連詞」の類別の使用率は表 1 のようである。表 1 から分かるように中国語の作文では、もっとも多く使われる「連詞」は順接の接続関係を表す因果型の「連詞」である。その次は「並列」(8.47%)である。「連貫」「選択」の「連詞」は見つからなかったため、使用率はゼロになっている。

表 1. 「連詞」の使用率の内訳(「連詞」の類型別順)

類型	因果	並列	転折	递進	条件	目的	仮設	選択	連貫	総使用率
使用数	54	50	45	25	18	3	1	0	0	196/590
使用率(%)	9.15	8.47	7.62	4.23	3.05	0.51	0.16	0	0	33.2%

3-2 考察

範(2010a)は、中国人日本語学習者の日本語作文における接続表現の使用率が 28.4%、それに対し日本語母語話者の使用率は 24.6%のことを明らかにしたものである。さらに中国人日本語学習者の接続表現の多用の要因に関して、学習者は日本語母語話者と異なる文脈展開を示しているとまとめている。またこのような異なる文脈展開を形成する原因は中国語の文脈展開による干渉だと

考えている。今回の表 1 から分かるように 590 文からなる中国人母語話者の中国語作文で 196 個(33.2%)の「連詞」が使われている。日本語母語話者の接続表現の使用率 24.6%と比べて 9%多い。この統計データから中国人日本語学習者の日本語作文が日本語母語話者の日本語作文より接続表現が多いという事実は、ある程度中国語で作文を書く際に、多くの「連詞」を使うことと関係とあるといえる。

次に、表 1 の統計から中国人日本語学習者の日本語作文における接続表現の使用率(28.4%)は、同じ内容について書かれた中国語の作文における「連詞」の使用率(33.2%)より少ないことが

分かった。その理由は、中国語の「連詞」の中の「条件」「目的」「仮設」などの「連詞」は、日本語で表現する際にほとんど複文の中における接続助詞になってしまうからである。そのため、中国人日本語学習者は日本語の作文を接続表現の使用数が中国語の作文の時よりも少なくなったと考えられる。以上の中国語の作文における「連詞」の調査によって、中国語の作文における「連詞」、中国人学習者の日本語作文における接続表現、日本語母語話者の作文における接続表現の3者は、(10)のような関係にまとめることできる。もともと中国語の作文においてつなぎの言葉が多いから、中国人学習者の日本語作文はこの干渉を受け、接続表現が多用されることになる。

(10) 中国人日本語学習者の中国語作文における「連詞」>中国人学習者の日本語作文における接続表現>日本語母語話者の日本語作文

さらに「連詞」の類別から考えると、「因果」「並行」「転折」の3種が相当多く使われている。「因果」や「転折」は日本語における接続表現「順接」や「逆接」と非常に類似している。「並行」は部分的に⁷⁾日本語の「添加」と一致している。範(2010a)の中国人日本語学習者の日本語作文に関する調査では「順接」「添加」「逆接」の3種の接続表現が中国人学習者の日本語作文にもっとも多く使われている。このような現象も中国語の文脈展開における「因果」「並行」「転折」の多用による干渉だと考えられる。

以上、中国語作文における「連詞」の全体使用数と類別の使用状況について統計を取り考察を加えた。中国語作文の文脈展開に多くの「連詞」が使われることによる干渉を受け、中国人日本語学習者は日本語で作文を書く際に、日本語母語話者より多くの接続表現を使用している。さらに接続表現の類型から考えると、中国語からの干渉により、「順接」「添加」「逆接」の接続表現が多く使われている。本章は中国語における「連詞」の類型に基づき、中国語の作文における「連詞」に関する分析を行なった、次章では「連詞」を日本語の接続表現の類型基準に基づいて類型し、中国人日本語学習者の中国語作文における「連詞」、中国人学習者の日本語作文における接続表現、日本語母語話者の作文の接続表現の3者の関係と干渉状況について明らかにしたい。

4 日本語における接続表現の類型基準による「連詞」の分類

4-1 分類結果

日本語母語話者の日本語作文における接続表現の使用状況と比較するため、以上の「連詞」を市川(1978)の接続表現の類型方法で分類し、日本語母語話者の日本語作文における接続表現と中国人母語話者の中国語作文における「連詞」の使用状況を比較し、その関係を明らかにする。市川(1978)の日本語接続表現に対する類型法は接続表現の意味、及び文と文をつなぐ際に形成される文と文の意味関係による類型法である。本稿は中国語の「連詞」を市川(1978)の類型によ

中国語母語話者の中国語作文における「連詞」の使用特徴とその特徴が日本語作文に与える中国語干渉について(範)

って分類するため、類型の基準は市川(1978)の分類基準に従いたい。つまり各「連詞」の意味と文と文をつなぐ際に形成される文と文の意味関係に基づき、中国語の「連詞」を分類する。その分類の結果と使用数は表2のようである。

表2. 日本語の類型法による中国語「連詞」の分類と使用数

類型	中国語作文に使われる「連詞」	合計(個)
順接	所以・之所以・因此・因而・因为(だから、ですから)、由此(すると)、这样一来(そうしたら)	54
逆接	可是・但是・不过(しかし、でも)、而・当然・然而・尽管・尽管如此・虽然(といっても、それなのに)	45
添加	首先(まず)、再次・其次(つぎに)、最后(最後に)、不仅如此・还有・并且(さらに)、况且(しかも)、另外・也会・再一个・此外(また)同时(と同時に)	36
補足	なぜなら・というのは・なお	25
対比	一种说法(一方)・一方(一方)	9
同列	总而言之・也就是说(すなわち・つまり)、总之(要するに)、比如・例如(たとえば)	5
転換	ところで・やがて	0
その他 ⁸⁾	如果・只有・那末(…れば、…と、…なら)	18
	为(…のため)	3
	不管(…をしようと或は…であろうと)	1

表2のように、日本語の「順接」に相当する「連詞」がもっとも多くなった。その次は「逆接」と「添加」である。一方、表2の「その他」は中国語の場合には倒置の形で文と文の接続を実現するものである。例は次の11a、12aのようである。日本語に翻訳すると、11b、12bのような複文になることが多い。

11a 我可以帮助你。如果你有困难。(下線部は「連詞」及びそれに対応する接続助詞)

11b もしお困りの点がありましたら、力になってあげましょう。

12a 他一直坚持学习外语。不管工作多么忙。

12b いくら仕事が忙しくても、彼は外国語の学習をやめたがらない。

はじめに述べたように、本稿は文と文をつなぐ接続表現を研究対象にするため、以上の11aと12aのような「連詞」は、日本語の接続表現の類型基準による分類で考察する時には除外した

いと思う。そのような「連詞」を除くと、中国語作文における接続表現の使用率は29.5%⁹⁾になる。それは範(2010a)の日本語母語話者の日本語作文における接続表現の平均的使用率24.6%よりやや多い。さらに表2のように今回の調査で、「転換」に相当する接続表現は中国人母語話者の作文に見当たらなかったため、使用率がゼロになっている。

4-2 考察

表2の「連詞」は次の表3(次頁)の③「学習者の連詞」のようにまとめている。考察の便をはかるため、①の「日本語母語話者の日本語作文における接続表現」と②の「中国人日本語学習者の日本語作文における接続表現」(以下①②③の略称にする)と一緒に表3に収めている。表3の数字から主に2つのことが分かると考えられる。まず①と③は母語話者が母国語で(①日本語の作文、②中国語の作文)作文を書く統計データであり、同じく母国語を書く際に類似的傾向が見られている。さらに②は日本語学習者の日本語作文における接続表現で、第二言語で作文を書く際の接続表現のため、②と③の間に母国語の干渉による差が現れている。次は以上の母国語で作文を書く時の類似点と第二言語で作文を書く時の母国語の干渉について接続表現別に見てみよう。まず「順接」は②と③の使用率が非常に近く、逆に①と大きな差が見られている。この点から中国人日本語学習者は中国語ならびに日本語で作文を書く際に原因から結果までの順接の文と文の連接型が好んでいることが分かった。これは中国語の文脈展開から日本語への干渉だと考えられる。これに対して日本語母語話者は同じ傾向が示していなかった。

表3. 日本語接続表現の類型法による「連詞」の使用数

対象 類型	①母語話者の日本語作文における接続表現	②学習者の日本語作文における接続表現	③学習者の中国語作文における「連詞」
順接	24(13.6%)	64(28.4%)▲	54(31%)▲
逆接	48(27.3%)▲	48(21.3%)	45(25.9%)▲
添加	50(28.4%)▲	62(27.6%)▲	36(20.7%)
補足	17(9.7%)▲	3(1.3%)	25(14.4%)▲
対比	8(4.5%)▲	8(3.6%)▲	9(5.1%)▲
同列	25(14.2%)▲	37(16.4%)▲	5(2.87%)
転換	4(2.3%)▲	3(1.3%)▲	0▲

▲ 同じ傾向が見られるところ

「逆接」は①②③の間に大きな差が見られなかったが、①と③は母国語で作文を書く時の文連

中国語母語話者の中国語作文における「連詞」の使用特徴とその特徴が日本語作文に与える中国語干渉について（範）

接の表現の使用であり、両者は割りと差がないような数値を示している。逆に②は①と③より少し少ないことが分かる。「逆接」の使用の効果に関して、浜田(1995)は「自分と対立する意見に反論したり、内容の正当性に制限を加えたりして、議論を精緻に行い、自分の意見をより強くしている」と述べている。つまり「逆接」の使用は文章の論理展開の上で非常に重要である。以上のような現象から、学習者が「日本語の習得がまだ不十分で、語句や文型などの使用の不自由のため、うまく逆の立場から論点を精緻化できないため、「逆接」の使用が少なかったのだろうと判断できる。

「添加」について①の日本語母語話者と②の学習者の間に差はなかったが、それに対して中国語母語話者の③は少し低い数値である。範(2010a)は、日本語母語話者の作文における接続表現を統計し、日本語母語話者がもっとも多く使っているのが、「添加」の接続表現であることを明らかにした。「添加」の多用によって日本語母語話者はある論点に関して多くの証拠を並べ、論点を補強する傾向があるといえるだろう。一方②の学習者の日本語作文でも「添加」の接続表現が多く使われているが、①とは質の違いがある。つまり②の日本語学習者は日本語がまだ十分上達していないため、ある論点に焦点を当てて深く論じることができていないのである、一所懸命読者に自分の作文の意見の正しさを示そうとして、たくさんの証拠を累加しているわけである。このことは表3の学習者の「補足」の接続表現における使用状況を見れば、さらによく分かると思う。ある論点に集中して深く論じないため、学習者の「補足」の接続表現の使用は非常に少ない。一方、日本語学習者は中国語で文章を書く際には、「補足」の接続表現が①の日本語母語話者とあまり変わらなかった。つまり、学習者は「補足」の接続表現を使わないのではなく、日本語習得が不十分であるため、論点を深く掘り下げることができないという理由から、「補足」の使用率が低くなっているのである。

「対比」について①②③は同じ傾向を示している。「同列」の接続表現については②の学習者と①の母語話者とが同じ傾向を示している。日本語母語話者は「つまり」「たとえば」などの論点に対する補足表現を使う傾向がある。学習者が「同列」の接続表現を多用するのは、やはり日本語の習得が不十分な状態で、うまく説明できるかどうか心配があるため、何回も「同列」の接続表現を繰り返して使い、論点の補強作業をしていることの結果だと考えられる。「転換」は、母語話者と学習者の間に大きな相違が見られなかった。

以上、日本語の接続表現の類型基準によって、中国語の「連詞」を分類し、比較してきた。一般に日本語母語話者と中国人日本語学習者の間に文接続の語句の使用差を生み出す要因は母国語の干渉だと思われるかもしれないが、今回の考察で、学習者は中国語つまり母国語で作文を書く際、日本語母語話者の日本語作文と類似点がかかなりあったため、母国語の干渉だけではなく、第二言語学習者としての習得不足のためによって、特殊な文脈展開になることがあることも明らかになった。

5 結論と今後の課題

以上、中国人日本語学習者の日本語作文における接続表現の使用について母国語(中国語)の干渉があるか否かについて考察してきた。考察は主に二つの方法で行った。一つは中国人日本語学習者の中国語作文における文と文をつなぐ言葉「連詞」の使用から日本語作文に対する干渉があるか否か、もう一つは、「連詞」を日本語の接続表現の類型基準で分類し直し、日本語母語話者の日本語作文、中国人学習者の日本語作文、中国人日本語学習者の中国語作文の三者の文連接表現の使用を考察するというものであった。

結論として、中国人日本語学習者の作文における「連詞」の使用率 33.2%は、日本語母語話者の接続表現の使用率 24.8%より高く、範(2010a)の中国人日本語学習者の日本語作文の接続表現の多用はこの影響からといえるだろう。さらに中国人日本語学習者の中国語作文における「連詞」の使用率が同じ学習者の日本語作文の接続表現の使用率(28.4%)より高い現象は、「連詞」の「条件」「目的」「仮設」などが日本語の接続助詞に対応しているため、これらの「連詞」使おうとしても日本語の接続助詞に変身してしまう。その結果学習者の日本語作文の接続表現の使用率は母語の作文より少なくなるのである。「連詞」の類型から見ると、「因果」「並行」「転折」の3種が相当多く使われている。「因果」や「転折」は日本語の「順接」や「逆接」と非常に類似した意味機能を持つ。範(2010a)の中国人日本語学習者の日本語作文に関する調査では、「順接」「添加」「逆接」の3種の接続表現が中国人学習者の日本語作文にもっとも多く使われている。これも中国語の文脈展開方式の干渉による多用だと考えられる。

さらに、本稿は「連詞」を日本語の接続表現の類型基準で分類し直し、日本語母語話者の作文における接続表現、中国人日本語作文の接続表現と合わせて、3者間の関係を考察した。まず3者の使用データから考えると、中国人日本語学習者の日本語作文における「順接」の接続表現が多く、母国語の干渉があるといえる。他の接続型について母国語の干渉はそれほど顕著ではなかった。

一方、日本語母語話者の日本語作文と中国人日本語学習者の中国語作文との接続表現(「連詞」)の使用率に類似する点があることについて、中国人が母語で文章を書く際の特徴だと考えた。つまり第二言語の習得不十分という問題がなく、論点の正しさや補強などは母語話者としての能力の範囲で十分できるため、両者は「逆接」や「補足」の使用率が非常に似ている。それに対し、日本語学習者の日本語作文は日本語の習得の不十分さで、論点の反面や論点の深いところまで補足することはできなかった。「補足」の接続表現は著しく少なかった。ところが、学習者は論点の補足は少ないものの、文章の論理性や、論点の掘り下げなどができないという心配などで、「同列」の接続表現を用いて繰り返し説明することが多く見られた。そのため、「添加」や「同列」の接続表現の使用は日本語で作文を書く時に、著しく多くなったわけである。「対比」と「転換」の接続表現は3者の間に特に異なる傾向が見られなかった。

中国語母語話者の中国語作文における「連詞」の使用特徴とその特徴が日本語作文に与える中国語干渉について(範)

本稿は、日本語母語話者と中国人日本語学習者の日本語作文における接続表現の使用上の違いの要因を探るため、中国人日本語学習者の中国語作文における考察し、中国語の「連詞」の用法の干渉があるか否かを検討した。上述のように中国人日本語学習者の日本語作文における接続表現の使用は、中国語の干渉をうけるほかに、学習者の日本語の習得の不十分さによって特殊な文脈展開になることもある。今回は主に文と文の接続の言葉について考察した。中国人日本語学習者の作文の文脈展開上の特徴を明確にするには、中国語における文接続の連詞と日本語の接続詞及び接続助詞などの関係についてよりいっそう研鑽を重ねる必要があると考えている。

<注>

- 1) 実際の調査で「たとえば」や「とくに」や「さらに」のような言語単位が接続詞なのか副詞なのかということは、その判断が極めて難しいとされる(石黒 2009 を参照)。また接続詞という名称を用いると、「それにもかかわらず」や「換言すると」のような接続句が入るかどうか議論の対象になりかねない。以上のことに関して、市川(1978)は「接続語句」という用語を用いている。一方、「接続語句」と「接続表現」の関係は仁田・益岡(2002: 135)によると、「文章・談話における文連鎖の解明には、市川の接続語句よりさらに広い接続表現という新たな概念を導入することにする。接続表現には、用言の連用形・節・文・連文・段落などの言語単位による接続機能を有する表現を含める」とされている。つまり、「接続表現」は文接続の機能上「接続語句」と同様なものであるが、それはただ文章・談話の研究に応じて「接続語句」の範囲が拡大されただけなのである。以上の理由で、また本稿の用語の統一性を保つため、接続語句の代わりに接続表現の用語を用いた。ただし本稿での「接続表現」は、文と文をつなぐ接続表現に限定している。
- 2) 市川(1978)は日本語の接続表現を「順接型」「逆接型」「添加型」「対比型」「転換型」「同列型」「補足型」「連鎖型」など 8 種類に類型した。「連鎖型」は接続表現を使わない類別なので、本稿の研究対象から除いた。
- 3) 「条件」と「仮設」は倒置構文の時が多い。
- 4) 中国語は倒置の順で、対訳する日本語も倒置になっている。
- 5) 反事仮想のこと
- 6) 文の認定は句点主義である。つまり、句点で終わる文を一つの文と認定する。
- 7) 連詞の並列＝「添加」＋「対比」＋「同列」
- 8) 中国語で文と文を接続することができる「連詞」であるが、日本語に訳すと接続助詞になってしまった。そのため、その他の欄に入れた。今回の比較の対象外にする。
- 9) (196-22)/590=29.5%

<引用文献>

市川 孝 (1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版。

市川 保子(1998)「接続詞と外国人学習者の誤用」『九州大学留学センター紀要』9 pp.1-18.

張 誼生 (2000)「現代漢語虚詞」華東師範大学出版。

新華漢語辞典編集委員会(2004)『新華漢語辞典』商務印書館。

範 海翔 (2010a)「日本語母語話者と中国人日本語学習者の意見文における接続表現に関する

比較研究」『言語の普遍性と個別性』1、新潟大学大学院現代社会文化研究科、pp. 87-105.

範 海翔 (2010b)「日本語母語話者と中国人日本語学習者の意見文における論理的文脈展開に関する比較研究」『現代社会文化研究』47、新潟大学大学院現代社会文化研究科、pp.251-265.

- 範 海翔 (2010c) 「日本語母語話者と中国人日本語学習者における接続表現の省略に関する対照研究」
『現代社会文化研究』49、新潟大学大学院現代社会文化研究科、pp.17-30.
- 浜田麻里 (1995) 「トコロガとシカシ・デモなどー逆接続詞の談話における機能ー」宮島達夫・仁田義雄
(編)『日本語類義表現の文法(下)』くろしお出版.
- 呂 淑湘 (1980) 「現代漢語 800 詞」商務印書館.
- 呂 淑湘 (2005) 「語法修辭講話」遼寧教育出版社.

主指導教員 (福田一雄教授)、副指導教員 (高田晴夫教授・朱繼征教授)